

CAQ 版 ER 尺度 (CAQ-Ego-Resiliency Scale) 作成の試み

Construction of Japanese Version CAQ-Ego-Resiliency (CAQ-ER) Scale

中尾 達馬¹⁾

Tatsuma NAKAO

九州大学大学院人間環境学研究院
Department of Psychology,
Faculty of Human-Environment Studies,
Kyushu University

加藤 和生

Kazuo KATO

九州大学大学院人間環境学研究院
Department of Psychology,
Faculty of Human-Environment Studies,
Kyushu University

ER (Ego-Resiliency) とは、ストレスを体験する状況で、自我の制御 (Ego-Control) を柔軟に調整する能力と定義されている (Block & Block, 1980)。そのためこの能力は、同じ逆境の状況にあっても、それを乗り越え、その経験を自己の成長のために利用できる人とそうでない人の違いを理解する上で極めて重要な概念だと言える (Klohnen, 1996)。そして、この ER と他の重要な心理学的構成概念 (e.g., 情動知能) との関係を探ることが、今後ますます必要になると考えられる。

だが ER は今まで、主に Q セット法で測定されてきた (e.g., CAQ, the California Adult Q-Set; Block, 1978)。この方法は、実施する上で多大な労力を要するため (e.g., 複数の観察者が必要)、ER と他の重要な構成概念との関係をいろいろな観点から検討することが困難であった (cf. Klohnen, 1996)。こうした状況を打開するために、Klohnen (1996) はより利便性の高い自己報告型尺度の開発を試みている。彼女は、欧米で広く用いられているパーソナリティ・テストの中から関連する項目を選択し、ER 尺度を作成した。具体的には、彼女は、CPI (the California Psychological Inventory; Gough, 1987) から項目を選択することで CPI 版 ER 尺度を、そして MMPI-2 から項目を選択することで MMPI-2 版 ER 尺度を作成し、これらの尺度の信頼性と妥当性の確認を行っている²⁾。だが、彼女が作成した ER 尺度と CAQ で測定された ER の値との間には、必ずしも一貫して高い相関が得られているわ

けではない (例えば、CPI 版 ER 尺度と CAQ により測定される ER の値との相関は.25 から.49 であった)。Block が提案した ER という構成概念をより直接的かつ忠実に反映する自己報告型尺度を作成するのであれば、CPI の項目ではなく Block の CAQ 項目を用いて ER 尺度を構成する必要があるう。

そこで本研究の目的は、CAQ の中で ER の典型的な特徴を表した 26 項目 (Block, 1991 ; 半数の 13 項目は逆転項目) から ER 尺度を作成し (以後、CAQ 版 ER 尺度と呼ぶ)、この尺度の妥当性や信頼性 (α 係数, 再検査信頼性) を検討することである。妥当性の検討に際しては、まず、CAQ 版 ER 尺度と MMPI-2 版 ER 尺度の日本語版³⁾との間に正の相関があるかどうかを確認する。そして、CAQ 版 ER 尺度と自己に関連する尺度や社会的望ましさに関連する尺度との関連についての次の 3 つの予測を検討する。

第 1 に、ER が高いほどストレス状況下でも自己に対するポジティブな見方を保つことができると想定されるため、CAQ 版 ER 尺度は自尊感情尺度 (Rosenberg, 1965) との間では正の相関があると予測される。

第 2 に、上述と同じ想定から、CAQ 版 ER 尺度は愛着スタイル尺度 (i.e., ECR, the Experiences in Close Relationships Inventory; Brennan, Clark & Shaver, 1998) の「見捨てられ不安 (ネガティブな自己観)」や自我強度尺度 (長尾, 2002 ; 得点が高いほど自我が弱いことを示す) との間では負の相関があると予測される。

第 3 に、CAQ 版 ER 尺度は社会的望ましさとは無関係であると想定されるため、MMPI-2 の L 尺度 (Lie scale) とは無関係であると予測される。

1) 本研究の実施にあたりいろいろとご協力・アドバイスを頂きました丸野俊一先生、箱田裕司先生、中村知晴先生、榎祐子先生、大黒剛さん、丹羽空さん、Aman Saleh さん、研究室の皆様方に心より感謝申し上げます。
2) Klohnen (1996) の当初の目的は CPI 版 ER 尺度の開発であった。だが彼女は審査者から、CPI と MMPI-2 には類似した項目が多いため、MMPI-2 からも ER 尺度を作成できるのではないかという指摘を受けた。そこで彼女は、MMPI-2 からも ER 尺度を構成してしまった。そのため、結果としては 2 つのバージョンの ER 尺度が存在することになった。ただし、CPI 版と MMPI-2 版の ER 尺度は非常に類似している ($r = .84$; Klohnen, 1996)。

3) CAQ 版 ER 尺度の妥当性検討の際に、CPI 版ではなく MMPI-2 版の ER 尺度を用いる理由は次の通りである。すなわち、Klohnen (1996) が依拠した CPI と日本語版 CPI (我妻・川口・白倉, 1967) とではバージョンが異なるため、CPI 版 ER 尺度の日本語版作成が困難であったためである。

Table 1 2回の調査で用いた質問紙構成^{a)b)}

質問紙を構成する尺度	
1回目	CAQ 版 ER 尺度 (7 件法, 26 項目), MMPI-2 版 ER 尺度 (6 件法, 22 項目), 自尊感情尺度 (7 件法, 10 項目), ECR (7 件法, 36 項目)
2回目	CAQ 版 ER 尺度, 自我強度尺度 (3 件法, 10 項目), MMPI-2 の L 尺度 (2 件法, 15 項目), ECR

a) MMPI-2, ECR, 自尊感情尺度については, それぞれ小口 (2001), 中尾・加藤 (2004), 加藤 (1999) を用いた。また, 自我強度尺度については, 長尾 (2002) を用いた (この尺度は, Cattell (1965) の自我強度尺度から 10 項目を選択することで作成された尺度である)。
b) 評定値は, 2 件法: 「いいえ, はい」, 3 件法: 「いいえ, わからない, はい」, 6 件法と 7 件法: 「最小値 = “全く当てはまらない” から最大値 = “非常によく当てはまる” である。

Table 2 CAQ 版 ER 尺度の因子分析結果 (N=347, 累積説明率 = 38.35%, 因子間相関 = .34)

項目	F1	F2
F1: 「対他的 ER」, $\alpha = .84$, $M = 4.24$, $SD = .98$		
01. 私は, 人から自分に対する好意や受容を引き出すことができる。	.73	-.03
02. 私は, ころがあたたく, 親密な関係を持つことができる。	.70	-.02
03. 私は, みんなの集まる場で, 存在感がある。	.67	.00
04. 私は自分からユーモアを言える。	.66	-.13
05. 私は人の気持ちや微妙な表情の変化を読みとるのが上手だ。	.60	-.15
06. 私は人のユーモアにのれる。	.60	-.03
07. 私は人と関係をとるのが上手だ。	.57	.01
08. 私は大切な問題の本質を見抜くことができる。	.47	.15
09. 私は, 本当に頼りがいがあり, 責任感がある。	.45	.18
F2: 「対自的 ER」, $\alpha = .79$, $M = 3.77$, $SD = 1.16$, 全て逆転項目(R)		
10. 私は基本的に不安が強い。(R)	.04	.75
11. 私は, いろんなことであれこれ考えてしまい, それらが頭から離れないことが多い。(R)	.18	.68
12. 私は現実あるいは想像上の脅威(恐れ)に対してもろい。(R)	-.02	.68
13. 私は, 自我が弱く, ストレスがかかると上手く振る舞えない。(R)	.16	.60
14. 私はいつも自分のことをダメだダメだと思っている。(R)	.20	.57
15. 私は, 運命にほんろうされ, つらい思いをしてきたと感じる。(R)	-.08	.48
16. 私は, 自分のちょっとした欲求不満やイライラした気持ちに過度に反応してしまう。(R)	-.11	.46

方 法

調査対象者 1回目の調査の調査対象者は女子大学生 353 名であった (平均年齢 19.5 歳)。また, 2回目の調査の調査対象者はその内の 292 名であった。

質問紙 2回の調査で用いたフェイスシート (e.g., 年齢, 恋愛経験の有無) 以外の質問紙構成の詳細については, Table 1 に示した。

CAQ 版 ER 尺度の日本語版作成過程 CAQ 版 ER 尺度の日本語版作成は, 以下のステップで行った。まず, 第 1 著者と大学院生 1 名 (カナダ滞在期間 5 年) が協議を行いながら CAQ 版 ER 尺度の日本語版の草案を作成した。そして, 第 2 著者 (在米期間 10 年) がこの草案のバック・トランスレーションを行った。次に, カナダ人の男性と大学院生 (在米期間 7 年) が CAQ26 項目とバック・トランスレーション版 ER 尺度の意味やニュアンスが同じかどうかを検討した。

そして, この検討結果に従い, 著者 2 名が, ニュアンスが異ならないようにしながら CAQ 版 ER 尺度の日本語訳を修正した。最後に, 日本人の大学生 1 名と大学院生 2 名が日本語らしさや文意の明示性を確認した。

調査時期 調査は, 2003 年 11 月中旬と 12 月中旬に実施した (調査の間隔は 1 ヶ月)。

結果と考察

CAQ 版 ER 尺度の因子分析 CAQ 版 ER 尺度 26 項目について, 最小 2 乗法・プロマックス回転による因子分析を行った。3つの観点 (固有値の推移, 解釈可能性, 因子負荷量.40 以上) から因子数の決定や項目の選択を行った結果, 2 因子解 (16 項目) が適当であると判断した (Table 2)。第 1 因子は, 人とのかわりにおける ER であると捉えることができるため, 「対他的 ER」と命名した。また, 第 2 因子は, 自我の脆性 (Ego-brittleness; Block & Block, 1980) である

Table 3 CAQ 版 ER 尺度と5つの尺度との相関^{a)b)}

1回目	MMPI-2 版 ER N=353	自尊感情 N=353	見捨てられ不安 N=274	親密性の回避 N=274
F1: 対他的 ER	.48**	.57**	-.16**	-.28**
F2: 対自的 ER	.71**	.65**	-.48**	-.02
2回目	自我強度 N=290	L 尺度 N=288	見捨てられ不安 N=225	親密性の回避 N=225
F1: 対他的 ER	-.29**	.07	-.20**	-.34**
F2: 対自的 ER	-.57**	.27**	-.41**	-.07

a) ** $p < .01$ である。

b) MMPI-2 版 ER と自尊感情の相関は.77, 自我強度と L 尺度の相関は -.34, ECR の 1 回目と 2 回目の相関については、「見捨てられ不安」では.80, 「親密性の回避」では.85 であった (全て, $p < .01$)。

と考えられる。ただ、この因子名を「自我脆性」としてしまうと、ER と逆の意味を持つ因子名になるため、「理解のしやすさ」という観点から、全項目を逆転させた上で「対自的 ER」と命名した。なお、これら 2 因子については、十分な信頼性 (α 係数) が得られた (Table 2)。

妥当性の検討 CAQ 版 ER 尺度の妥当性検討に必要な計 5 つの尺度得点を以下の手順で算出した。まず、MMPI-2 版 ER 尺度 22 項目について、最小 2 乗法・プロマックス回転による因子分析を行った。3 つの観点 (固有値の推移, 解釈可能性, 因子負荷量.40 以上) から因子数の決定や項目の選択を行った結果、1 因子解 (15 項目) が適当であると判断したり (累積説明率 = 34.20%, $\alpha = .88$)。そこで Klohnen (1996) にもとづき、この因子を「MMPI-2 版 ER」と命名し以後の分析で用いた。次に、自尊感情尺度は Rosenberg (1965), ECR は中尾・加藤 (2004), 自我強度尺度は長尾 (2002), L 尺度は小口 (2001) に従い、それぞれの尺度得点を算出した。

CAQ 版 ER 尺度の得点と上記の 5 つの尺度の得点との相関係数を算出した結果、CAQ 版 ER 尺度は MMPI-2 版 ER 尺度との間に正の相関があることが確認されかつ 3 つの予測についてもほぼ支持された (Table 3)。よって、CAQ 版 ER 尺度の妥当性は確認できたと言える。ただし、CAQ 版 ER 尺度と ECR の関連についてはさらなる検討が必要であろう。

再検査信頼性の検討 2 回の調査における CAQ 版 ER 尺度の得点の相関係数を算出した ($N=292$)。その結果、CAQ 版 ER 尺度の 1 回目と 2 回目の相関は、「対他的 ER」では.83, 「対自的 ER」では.81 であった (両方とも, $p < .01$)。このことにより、CAQ 版 ER 尺度は、1 ヶ月という期間では、再検査信頼性が高いことが示された。

以上のことから、CAQ 版 ER 尺度の信頼性と妥当性は確認できたと言える。ただし、CAQ 版 ER 尺度と自尊感情尺

度との相関が高いため (Table 3)、今後は ER と自尊感情に共通する部分や共通しない部分についてさらに理論的・実証的な検討を行う必要があらう。また、CAQ 版 ER 尺度の妥当性をさらに高めるためには、自己評定と他者評定との関連を検討する必要があるだろう。

引用文献

- Block, J. 1978 *The Q-sort method in personality assessment and psychiatric research*. Palo Alto, CA: Consulting Psychologists Press.
- Block, J. 1991 *Prototypes for the California Adult Q-set*. Berkeley: Department of Psychology, University of California. (後述の Klohnen (1996, p. 1079) の Appendix A より間接引用)
- Block, J. H., & Block, J. 1980 The role of ego-control and ego-resiliency in the organization of behavior. In W. A. Collins (Ed.), *Minnesota symposia on child psychology*, Vol. 13. Hillsdale, NJ: Erlbaum. Pp. 39-101.
- Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. 1998 Self-report measurement of adult attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson, & W. S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships*. NY: The Guilford Press. Pp. 46-76.
- キャッチル, R. B. 斎藤耕二 (訳) 1981 パーソナリティの心理学: パーソナリティの理論と科学的研究 金子書房 (Cattell, R. B. 1965 *The scientific analysis of personality*. NY: Penguin Books.)
- Gough, H. G. 1987 *Administrator's guide for the California Psychological Inventory*. Palo Alto, CA: Consulting Psychologists Press.
- 加藤和生 1999 「甘え」に関する認知・人格/社会心理学的観点からの総合的アプローチ 科研・基盤研究 (C-2) 一般 (課題番号: 09610129)
- Klohnen, E. C. 1996 Conceptual analysis and measurement of the construct of ego-resiliency. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 1067-1079.
- 小口 徹 2001 国際的質問紙法心理テスト MMPI-2 と MMPI-A の研究 北里大学看護学部精神保健学教授 平成 12 年 3 月退任記念論集
- 長尾 博 2002 青年期の自我発達上の葛藤から不適応状態への心理過程 発達心理学研究, **13**, 295-306.
- 中尾達馬・加藤和生 2004 成人愛着スタイル尺度 (ECR) の日本語版作成の試み 心理学研究, **75**, 154-159.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. NJ: Princeton University Press.
- 我妻 洋・川口茂雄・白倉憲二 1967 CPI カリフォルニア人格検査 誠信書房

- 2004. 4. 28 受稿, 2004. 9. 3 受理 -

4) 本研究で MMPI-2 版 ER 尺度として用いた項目は次の 15 項目である: 9, 38, 52, 73, 95, 130, 243, 275, 325, 328, 364, 454, 463, 516, 554 (それぞれ MMPI-2 の項目番号に対応している。9 と 95 以外は全て逆転項目である)。